

## 会長退任にあたり



前日本癌病態治療研究会 会長  
前 東海大学 消化器外科 教授  
日高病院 臨床腫瘍科 部長

生越 喬二

前会長の磯野可一先生から平成17年6月に会長を引き継ぎ、昨年の平成24年6月に、会長を退任いたしました。会員の皆さまのご協力により、無事に竹之下誠一教授に会長を引き継ぎ、やっとその重責から解放されました。その間、会員皆さまのご協力、ご支援に深く感謝申し上げます。

本研究会の発足趣旨、あゆみ、変遷、医学界における独自性、責任感などは磯野可一先生の会長退任にあたり（W' Waves Vol.12, pp.10-12, 2006）にすべて網羅されています。私の会長としての役割はそれをさらに発展させることだと考え、邁進してまいりました。本研究会の独自性は会則第2条（目的）にありますように、「本会は癌の病態や治療法に関する研究を行い、その病態（素因や環境因子など）に基づく、個人個人に適した治療法の確立、すなわち、種々の臓器の癌患者の持つ悪性度にあった治療や、宿主側の生体反応にあった治療法の確立をめざし、患者の quality of life (QOL) などの向上を図ることを目的とする。」ことでした。私はこの目的を達成するために尽力してまいりました。この目的を達成するために研究班を継続し、研究費などの資金援助など、班員の先生方と一体となって邁進してまいりました。HLA 班研究の班員の先生方を中心として、故人となった会員の先生方も含めた会員諸兄の絶大なる協力で、“Effective and ineffective personalized therapy based on serum HLA from a 30-year odyssey”, *Annals of Cancer Research and Therapy*, Vol. 19 (2011), No. 2, pp. 44-53としてまとめさせていただきました。この成績は本研究会にかかわった先生方すべてのご協力の賜物で、また成果であると思っていますので、一読していただくことを切に願っております。個人々に適した治療（適切治療）を行えば、患者さんたちの

QOLを損なうことなく、長期間生活をしていただくことが可能であること。特筆したいことは、やっではない治療法（不適切治療）が存在していることが判明したことだと思います（W' Waves Vol.18, pp.36-46, 2012）。QOLに関しては、QOL班の班員の先生方を中心として、日本 original な英文、和文の QOL-20質問票を作成し、EORTC-30質問票より臨床的な意義が認められていることを確認しました。

以上述べたことは衆人に認められたわけではありません。追試が必要であり、この意味でも将来、本研究会の存在する意義、独自性が認められる時代が来ることを切に願っております。本研究会は発足時より英文誌（*Annals of Cancer Research and Therapy*）、和文誌（W' Waves）を発行してまいりました。W' Waves の雑誌名に私たちのもうひとつの目標、願いが込められています。すなわち、臨床医と基礎学者が協力して本会の目的を達成するために協力しようという、今で言う、Translational Research を行いたいという目標です。これは、HLA 班、QOL 班で実を結んで成果が得られました。一方、本会は学会ではなく研究会であることで、oncologist の教育、訓練、評価など専門医に関する活動には限界を感じましたが、研究会でなければできないことがないか今後検討することを望みます。

日本癌病態治療研究会が磯野可一先生を会長として発足し、今年は第22回研究会を迎えることとなります。諸般の事情により NPO 法人化し、今回の世話人会で承認されれば、来年の第23回研究会より NPO 法人日本癌病態治療研究会として再出発することとなります。磯野可一先生より、学会にするのか、研究会として継続するのか、問いかけられていました。先生からのお言葉にもあるように、研究会の独自性が維持できれば、若手の負担が多い学会にしくなくてもいいのではないかと考えました。逆に言いますと、本研究会は、それだけどこにもない独自性を持っているのだと思っています。本研究会は、会員の先生方のためでもあり、延いては患者さんの適切治療や QOL の向上に役立ち、社会に貢献することを願っております。

最後に、今までご指導いただいた磯野可一名誉会長に厚く御礼申し上げます。また、竹之下誠一新会長に対して会員の皆さまのこれまで以上のご厚情をお願いするとともに、本会のさらなる発展を祈念しております。